

第14回国際マイクロマシンサミットの開催(4月30日～5月3日)

第14回国際マイクロマシンサミットが、4月30日(木)から5月3日(土)の4日間、韓国・大田市(デジョン)のホテル・リベラ「ダイナスティー・ホール」で開かれました。

マイクロマシンサミットは1995年に第1回会議を京都で開催してから、開催希望国の持ち回りで毎年開催していますが、第14回を迎えた今年は、イベリア地域とルーマニアが新たに加わって、18カ国/地域(オーストラリア、ベネルクス地

域、カナダ、中国、EC、フランス、ドイツ、イベリア地域、インド、日本、韓国、地中海地域、ノルディック地域、ルーマニア、シンガポール、スイス、台湾、アメリカ)から代表者56名、オブザーバ43名の合計99名の参加がありました。(参加国としては26カ国)

今回の会議では、各国/地域のカントリーレビューがチーフ代表者から述べられた後、32人の各国代表者から技術統合、最新技術、市場・標準化・産業化動向、教育と技術プラットフォーム、ファンドリーとクラスターネットワークの5分野に関して、各地域の活動状況や将来動向に関してのプレゼンテーションが行われました。

日本からは、東京大学下山勲教授をチーフデリゲートとして、オブザーバー参加を含め10名の方々が参加され、3件の発表を行いました。

各国/地域のカントリーレビューでは、チーフデリゲートである東京大学の下山教授から、日本の科学技術政策におけるMEMSの位置づけ、MEMS分野の技術戦略マップ、標準化ロードマップ、MEMS協議会の役割・活動、MEMS-ONE、ファインMEMS、BEANSなどの日本の国プロ推進の状況などを発表され、三菱電機(株)久間上席常務執行役からは次世代BEANSプロジェクトの概要紹介、オリンパス(株)の唐木執行役員からはオリンパスのMEMS技術の紹介を行いました。



今回のサミットでの各国発表内容から、現状のMEMSに関しては、8インチの新規ライン構築やCMOS MEMSを含めた量産化の加速、次世代MEMSに関しては、ナノ・パイオさらには異分野融合による新しいプロセスやデバイスの創出など、世界各国はほぼ同じ方向性でマイクロ・ナノテクノロジーの研究開発を進めていることがわかりました。さらに、インド、イベリア、中国等のMEMS技術開発の進展も著しいことが感じられました。

また、今年のサミットでは、2日間の会議を挟んで第1日目と第4日目にテクニカルツアーが設定され、LG電子(LG Electronics Institute of Technology)、サムソン電機(Samsung Electro-Mechanics)、Korea Institute of Machinery & Materials(KIMM)、Electronics and Telecommunications Research Institute(ETRI)、Korea Research Institute of Bioscience and Biotechnology(KRIBB)、National Nanofabの見学も行われました。

次回は来年の5月5日～8日にカナダのエドモントンで開催の予定です。

この国際マイクロマシンサミットがMEMSおよびナノテクノロジーに関する国際交流の場として益々活発化することが期待され、大いに活用して頂きたいと思えます。